

## 2023年度 公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費 実績報告書

2024年 4月 30日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 文学部・教授

(氏名) 竹川大介

公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	共同体と伝統文化に視点をおいた街のレジリエンシー - 巨過市場と門司港の事例から					
	合計	使用内訳 (単位: 円)				
交付決定額	600000	備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
執行額	600000		575,462		16,220	8,318
執行残額	0					
共同研究者	所属・職名		氏名		役割分担等	
	文・教授		竹川大介		研究代表者	

研究分野: 地域研究・人類学

キーワード: レジリエンシー・災害復興・街づくり・SDGs

### 研究成果の概要 (和文)

北九州市の巨過市場と門司港での社会活動を通じて、地域が持つ特性や文化的資源を活かした、市街地の共同体の再生の実践をおこない、その成果を映像などにまとめた。またこうした研究活動を通じて、門司港の美術館の管理委託をおこなうこととなり、ここを地域の文化拠点として活用して行く予定である。

### 研究成果の学術的意義や社会的意義

地球温暖化による風水害の被害の拡大や、頻発する震災など、さまざまな災害に対して街の共同体を活用しながら、どのように市街地の強靭さを維持するかが、昨今の大きな課題となっている

また人口が減り衰退化し続けている市街地のコミュニティを、新しい視点を取り込みな

から古民家の再生など残されている文化資源を活用することによって、街の復興や再生につながる社会事業を実施した。

## 1. 研究の背景

北九州市の旦過市場は、2022年4月19日未明、8月10日の深夜に、2度にわたる大規模な火災に見舞われ、新旦過地区と市場地区をあわせて87軒の店舗が被災した。研究代表者は2008年より学生とともに旦過市場で「大學堂」を運営しており、今回の火災で被災の当事者となった。

同市場では2009年と2010年に豪雨による水害が発生し、河川改修を目的とした整備事業計画が進められてきた。そうした中で研究代表者は、立て替えが予定され街なみが大きく変化する市場の記録を残しておくために、2020年より映像を利用した社会調査をおこなってきた。まさに新型コロナの蔓延のなかで店主らのインタビューを進めている最中に、今回の火災が起きてしまった。

こうした経験を踏まえて、旦過市場や北九州の街を対象に、共同体と伝統文化に視点をおいた街のレジリエンシーを調査し、今後のまちづくりに生かせる知見を集約する。

## 2. 研究の目的

本研究では、主に以下の4つの切り口から調査および社会実践をおこなった。この課題のうち1から3はSDGsの「11. 住み続けられるまちづくりを」4は「8. 働きがいも経済成長も」と深く関連するものである。

1) 火災や水害による被災の社会的影響を記録し、気候変動への対策や災害への備えをすすめるための施策の検証に活用する。被災前の調査で得られたインタビュー資料と比較しながら、被災後に市場の共同体の形がどう変化したか映像記録の収集をおこなう。さらに、こうした調査の記録をこれからの防災に生かせるよう、アーカイブ化し地域に還元する。

2) 都心部の生活サービスである市場を、安全で豊かな社会基盤として活用していくための知見を集約する。これまでの14年間の大學堂での実践の記録をまとめ、地域の市場が、商品の販売だけではなく、地域の人びとの生活において、どのような人間関係を生み出し、社会的な基盤として機能していたかを実証する。この研究成果は共著の出版物としてまとめられる。

3) 古民家や町並みなどを保護しながら、観光や文化資源として活用していくための社会実験を検証する。新しい「大學堂」は、市内門司港にある築百年の旧岩田商店に移転した。これを機会に、小倉と門司の街の違いに注目し、それぞれの文化資源をもとにした街づくりのありかたを検証する。また研究代表者とそのゼミ生たちは、これまで旧岩田商店と門司港の歴史に関する調査をおこなってきた。門司港は古くからの国際港として海外に開かれ、北九州地区の文化的な中心地であり、近世の瀬戸内海運から、鉄道と

関門トンネルを介した戦前戦後の九州経済の発展に寄与している。しかしながら、こうした歴史と文化の遺産は、十分に活用されないまま残されているものが多い。

4) 地方の文化振興・産品販促につながる持続可能な観光業の基盤として、コミュニティの活用による市街地のレジリエンシーを分析する。上記の3つの事業計画をとりまとめる形で、その成果を北九州地域の発展につなげるための分析と提案をおこなう。

### 3. 研究の方法

1) ひとつめの事業計画に対しては、これまでの旦過市場での研究成果をもとに具体的な実施計画がすでに進行している。火災以前に記録されたインタビュー映像を整理し、さらにそれらを火災以降の新しいインタビューと比較しながら、撮影や編集技術を習得している学生たちとともにまとめていく。年度の前期は、資料整理と取材を中心に、後期にはその編集作業を中心とした作業スケジュールを予定している。なお、この研究は災害以降の変遷を視野に入れた長期にわたるデータ収集が重要となるため、単年度の調査で終わらない場合には、さらに継続して研究をおこなう。

2) これまでの14年間の大學堂での実践の記録のなかには、市場という特異な場所で、どのようにコミュニティが形成されているかという知見が集められている。これらは人類学や民俗学などの地域研究に比類するフィールドからの一次資料となっている。そこで、これまで大學堂に関わった学生や研究者たちと年間で2回程度の共同研究会をひらき、こうした知見を分析し、都心部の社会基盤としての市場の実態を明らかにしていきたい。また、この共同研究会と平行して原稿を依頼し、14年間の大學堂での活動に関する書籍の出版をすすめていく。

3) 門司港での新しい大學堂の活動は月に一度程度を想定している。旧岩田商店と同様に市の文化財に指定されている三宜楼や、出光資料館などの地域の文化施設と連携しながら、音楽演奏や講演会など、古民家や町並みを活用した文化事業の実践をおこなう予定である。本研究ではこうした社会実験の効果を検証する。さらに、これまでおこなってきた門司港と岩田商店の歴史に関する調査も、継続的な研究課題として引き続き進めていく。

4) 上記3つの調査と実践の成果を元に、地方の文化振興・産品販促につながる持続可能な観光業の基盤として、都心部のコミュニティの活用による街のレジリエンシーを考察する。具体的には、それぞれの事業計画がどのように町の復興に寄与していくのかについて、参加者に対するアンケートなどによる事前と事後の検証データを集め、実践の効果を実証的に明らかにしていく。

### 研究成果

1) 火災以前に記録されたインタビュー映像を整理し、さらにそれらを火災以降の新しいインタビューと比較しながら映像編集をすすめた。さらに火災後の市場や再出発し

た映画館などの聞き取り調査をおこない、火災前後の変化を追った。市場では多くの店主が廃業を余儀なくされ、以前から計画されてきた再整備によってあたらしくできる市場は顔ぶれがかわることが予想される。

2) 大學堂での活動の記録をまとめて映像や写真類を整理した。こうした成果は、活動や調査に関わった学生たちと共に北九大文化資源講演会などで発表をおこなった。14年にわたり記録が残されているために調査は1年ではおわず、資料整理を今後も引き続きおこなう予定である。成果物としての出版は、多数の方に原稿を依頼し、年度内に出版を予定していたが、間に合わなかったため、引き続き本研究を継続し出版を実現する予定である。

3) 新しい大學堂の活動を継続し、台湾と門司港との学生交流も兼ねた共同研究会や、岩田酒店のフィールドワーク実習など、門司港を起点とし精力的に社会実践や文化事業をすすめた。また7月からは、門司港に大正時代に建築された旧三井分散関連の洋館(旧カボチャドキヤ国立美術館)の管理運営を委託されることになり、再オープンのための準備を半年かけて進めた(2024年5月1日オープンの予定である)、1月にはこの洋館の特性を活かして北海道の音楽家やダンサーを招いたイベントをおこなった。こうした事業によって門司港地域のあたらしい人脈を広げることができた。

4) 門司港は過去に非常に栄えた街でありながら、船舶貿易の衰退と共にかつての賑わいを現在は見る影もない。しかし、当時からの地で涵養されてきた文化資源は、一部のこされており、芸術家や音楽家が多く住む街として、同じ北九州でありながら小倉とは異なる街の様相を呈している。こうした街の特徴を活かすことで、事業を通してこれまでの旦過市場の活動とは異なる視点から、賑わいづくりの提案をおこなうことができた。その大きな成果のひとつとして、大正期の洋館の運営を手がけることとなり、今後も継続的にギャラリーやライブハウスなどの街の文化拠点として活用する機会を生み出すことができた。

また、旦過市場での大學堂の活動の継承として、北九州中央卸売市場との共同事業や沖縄での魚市場の調査もおこなった。新しい市場の機能として地元への食の提供だけでなく、外国人などの観光客を対象とした、その土地の風土を活かした食の提案やイベント作りなど、北九州の街作りの参考となる知見を得ることができ、実践につなげた。